

## ドイツ語の弱定名詞句 —— 定冠詞はどこまで「定」か？ ——

吉 田 光 演

### 0 本論文の目的

本論文では、ドイツ語の弱定名詞句 (weak definites/ schwache definite NPs) について考察する。弱定名詞句とは、英語の go to {the bank/ the hospital/ the movie/ the theater/ the store} などの名詞句のように、指示対象の唯一性 (uniqueness) や既知性 (familiarity) といった定性条件 (definiteness) が前提されない名詞句を指す (Poesio 2004, Carlson, Sussman, Klein and Tanenhaus 2006)。例えば、„John went to the hospital.“ という文の発話で、話者が意図した病院は、特定の一つの病院に限定されている必要はなく、どこかの病院であってもよい。聞き手もまた、問題となる病院について知っている必要性はない。このような場合、定冠詞は定性に関与するのではなく、むしろ不定冠詞に近い不定性を表していると言える (「ジョンが行った病院がどこかに存在する」)。このように、弱定名詞句は通常の定冠詞が表す定性の意味解釈をもたない。

英語の場合と同じように、ドイツ語にもこのような弱定名詞句がある。

(1) Maria ist {zur Bank/ zum Krankenhaus/ ins Kino/ in die Oper} gegangen.

Mary is to-the bank/ to-the hospital/ into-the cinema/ into the opera gone

マリアは銀行へ／病院へ／映画に／オペラに行った。

ドイツ語の場合、定冠詞 der (男性)、das (中性)、die (女性) が an ,at/ on', in, zu ,to' のような空間前置詞と隣接する時、通常は前置詞との融合形 (ins <in das, zum <zu dem, zur <zur der などの融合形: contraction; Verschmelzform) が用いられる。例 (1) が表すように、前置詞・定冠詞の融合形 zur, zum, ins は弱定名詞句の機能を実現している。ただし、融合形のない前置詞・定冠詞形 in die ,into the' (in+女性名詞) であっても弱定名詞句として用いられる。本論で考察の対象とする問題は次のような問いである。

(2) 弱定名詞句の統語的・意味的・語用論的役割は何であるのか？ 弱定名詞句が定性と関与しないならば、定冠詞はどこまで「定」の機能をもつのか？ ドイツ語の融合形の機能と弱定名詞句との関連はどのように考えられるか？

定解釈と呼べない定冠詞については、ドイツ語の先行研究でも指摘はある (Duden 2006,

gebundener Gebrauch「拘束的用法」、Grimm 1986, konventionalisierter Artikelgebrauch「慣習化された冠詞用法」、関口 1960、「形式的定冠詞」。これらの定冠詞の見方は、定の用法とそれ以外の形式用法というように大きく二分類されている。一見、この二分法は、本来的用法と例外的用法といった一般的記述に即しているが、逆に、それによって定冠詞の幅広い機能の認識が妨げられ、冠詞をもたない日本語話者のようなドイツ語非母語話者による冠詞学習が困難となる。本論文では、定ではない（しかし形式的とは片付けられない）弱定名詞句を分析し、主語・目的語などの名詞句が項 (argument) として現れる環境では、定冠詞がデフォルト（無標）形として使用されること (Longobardi 1994)、それは、(不定冠詞を使わない場合) 指示対象の特定が明示的でない不定解釈を含むことを明らかにする。本論文の構成としては、1節で定冠詞の定性を考察し、2節において英語弱定名詞句の先行研究を検討し、3節でドイツ語弱定名詞句を分析し、4節で全体的に考察し、結論を述べる、というようになる。

## 1 定冠詞の表す定性・指示的機能

まず、定冠詞の意味の核心である定性とは何かについて整理しておく。定冠詞と不定冠詞 (definite article vs. indefinite article) における「定」「不定」という術語に見られるように、定冠詞と不定冠詞という対立があり、両者は相補分布をなすように思われがちであるが、ドイツ語の定冠詞と不定冠詞 (der/ein) は実際には相補分布をしていない。名詞句を先頭位置 (指定部) で限定する限定詞 (determine: D) の多様性についてはここでは詳述しないが、名詞と結びつく冠詞には、der と ein があるだけでなく、無冠詞 (zero article) という選択肢もある (φ Bücher ‚books‘ vs. die Bücher ‚the books‘, Ehrlich 2007, 吉田 2010)。さらには、限定詞には数量詞、量化詞も加わる (jeder ‚every‘, all ‚all‘, viel ‚many‘, einige ‚some‘ など。cf. 吉田 2003)。さしあたりここでは、定性について次のように定義しておく。

- (3) 定性は名詞句 NP (限定句 DP) に関する意味論的・語用論的カテゴリーであり、NP/DP が指示する対象・概念が曖昧性なしに限定・同定されることを表す。と同時に、話者だけでなく聞き手においてもこの限定・同定が可能であることを示す (Bisle-Müller 1991, Löbner 1985, Lyons 1999)<sup>1)</sup>。

定性をめぐっては意味論的定性や語用論的定性 (Löbner 1985)、唯一性と既知性についての議論 (Russell 1905, Heim 1982, Lyons 1999) など多様な議論があり、(3) が十分な定義であるとは言えないのは確かであるが、紙幅の都合上 (3) を前提する。限定 (determination) は、名詞句から言語外の対象・概念に向かう一義関係 (写像) が存在することを表し (関係認知が重要なのであり、対象自体は話者・聞き手に認知されていない場合もありうる)、同定

(identification) は、より進んで（未知－既知対象の関係のように）そのような対象・概念が共有知識・談話状況の中に実際に見出せ、個体として認知できることを表す（複数の対象候補があっても卓越した個体があれば成立し、必ずしも対象が唯一つしか存在しないことを意味しない）。(3) によって the mayor of a small town in Wales (Löbner 1985) のような、意味論的定名詞句としての関数名詞の定性が説明できる（全体の指示対象「市長が誰か」は決まらないが、the に関与する「市長」の一義的・唯一的関係は確定される）。また、Open the window! のような、唯一性・既知性の欠如の問題も回避できる（初めて窓に言及する場合も、窓が幾つもある場合でも談話状況で同定可能な場合、このような定名詞句の定性が保証される）。

定性を表す名詞句は定冠詞のある名詞句とは限らない。固有名詞や代名詞、指示詞なども定性を表すことができるが、これらの表現を定表現 (definite expression) と呼ぶ。定表現の中で、ここで問題とする定名詞句（定冠詞＋名詞）の特性を「確定記述 (definite description)」と呼ぶ。確定記述は、対象を記述する名詞の対象の集合（例えば、{book|a, b, c|}）について、定性をもつ定冠詞が限定している表現を表す（the book → 個体 a）。

他の定表現に対して確定記述としての名詞句がもつ意味論的・語用論的特質を理解する必要がある。例えば、das ,this/that', dieser ,this', da ,there' のような指示詞 (demonstrative) は直示 (Deixis) 表現として談話状況・場面に実在する個体を指し示す機能をもつ (Bühler 1982)。指示詞は、das Buch hier ,the book here' と das Buch dort ,the book there' のように、同類の対象を（話者からの距離によって）区別して個体を指示し伝達する働きをもつ。一方、定冠詞にはそのような指示・伝達機能はなく、対象が何らかの仕方で同定されることを標識として示すだけである（関口 1960「指示力なき指示詞」）。また、er ,he' のような人称代名詞は、基本的にテキスト内で照応的に使用され、先行（後続）の言語表現との照応関係によって対象の同一指示を確保する。例えば、(4) の代名詞 er は、その指示値を先行文の先行詞 einen Deutschen ,a German' との前方照応関係 (anaphor) によって受け取る。他方、文 (5) では、確定記述 the engine は先行詞 the car と直接的照応関係にはなく、the car との媒介関係（橋渡し：bridging、連想関係）によって一義的な指示対象の存在が仮定される（車の所属物としてのエンジン）。この場合、既知性は問題とならず、また唯一性も状況・知識によって仮定されるだけである（直時場面に関わる指示詞 this は、(5) のような連想・推論に基づく媒介関係を表すことはできない。Lyons 1999）。

(4) Ich habe gestern einen Deutschen getroffen. Er spricht sehr gut Japanisch.

I have yesterday a German met. He speaks very well Japanese.

私は昨日一人のドイツ人に会った。彼は日本語がとても上手だ。

- (5) I got into the car and turned on the/\*this engine. (「\*」は非文法性を表す)

私はその車に乗り込んでエンジンをかけた。

定冠詞の定性は、名詞句の指示対象が唯一的存在であることが保証されている「Sonne: 太陽」のような唯一名詞の場合でも当然表現できる。一方、唯一的存在物である場合、わざわざ直示的に指す必要がないので指示詞の使用はむしろ不適切になる。日本語の「その」は指示詞として使えるが、(6) のような文脈では不適切であり、定冠詞ではないことが分かる。

- (6) Die/\*Diese Sonne geht unter. 太陽が沈む / ?? その太陽が沈む

the/\*this sun goes under (「??」は容認度が非常に低いことを表す)

他方、定冠詞は総称表現(特性記述文)でも使えるが、総称表現は厳密な意味で個体指示的な表現ではない。総称演算子 GEN (=generic operator) は普遍量化詞  $\forall$  と似ているが、個体網羅的ではなく、個体全般に概ね妥当すればよい(例えば80%以上の割合)。たとえ談話状況にネコとしての個体がなくても(他の状況で該当すれば)、(7) は真になりうる。

- (7) The cat/A cat has a tail.  $GEN_x[x \text{ is a cat} \rightarrow \exists_y[y \text{ is a tail} \ \& \ x \text{ has } y]]$

(ほとんどの  $x$  について、 $x$  がネコなら、 $y$  が尻尾で、 $x$  がもつ  $y$  が一つある)

総称表現は、英語やドイツ語では定冠詞でも不定冠詞(裸複数形)でも表現可能であり、定名詞句固有の表現ではないので、本稿での定名詞句の議論では度外視する。

定冠詞による確定記述 = 指示表現の関係に当てはまらないものが、冒頭で触れた「形式的用法」としての定冠詞である。それは定名詞句がもつ指示性をほぼ失っていると言える。

- (8) a. im Westen, im Osten, auf der linken Seite 方角・時間 (全体一部分)

in-the west in-the east on the left side

- b. zum Abschluss bringen, zur Ruhe kommen (機能動詞結合)

to-the end bring to-the silence (stop) come

- c. Man soll den Tag nicht vor dem Abend loben. (慣用句)

one should the day not before the evening admire

(晩にならないうちに昼をほめてはいけない。「一寸先は闇」)

- d. Er zieht Kaffee dem Tee vor. (与格明示)

he prefers coffee (to) the tea (彼はお茶よりコーヒーを好む)

(8a) のような定冠詞には特に同定の機能はなく、形式的用法とされる。ただし、方角や時間を全体一部分関係と見れば全体の一部分として決定されている(「西の方角は一つのみ」と見る

こともできる(織田 2002)。(8b)のような(機能動詞結合といわれる)動詞の述語的意味の一部として取り込まれた定名詞句はもはや定性をもっていない。(8c)はイディオム・慣用句の一部として定名詞句が使われるもので、定性との関係はなくてよい。(8d)の与格定名詞句も定性との関係はなく、格表示のためにのみ現れる。これらの指示性の希薄な定冠詞の用法は一般に「形式的用法」と言われている(関口 1960, 有田 1992)。これらは確かに、明確な指示対象をもたない点では同じだが、本当に共通しているかどうかについては問題が残る。特に、これら形式的にのみ使われるとされる限定詞が、なぜ不定冠詞や無冠詞ではなく、定冠詞なのか、という問いについてはこれまであまり議論されてこなかった問題である。

## 2 英語の弱定名詞句についての先行研究

典型的な定性はないが、形式的とも言えない(9)のような英語の定冠詞用法があることについて、近年議論されている(Poesio 1994, Carlson and Sussman 2005, Carlson et al. 2006)。

(9) a. Mary went to the store.

b. Fred listened to the Red Sox on the radio.

c. I'll read the newspaper when I get home. ((9a-c) : Carlson et al. 2006の例)

(9a-c)の定名詞句は、特定の前置詞 in, on, to などと結びつき、特定の動詞、特定の名詞と結合する意味で慣用句的であるように思われるが、イディオムよりは生産性が高く、新しい結合も可能である(on the bus, on the flight, on the computer, go in the car, go to the concert, go to the mall など)。(9)のような定名詞句の指示対象は、唯一性を要求せず(状況内に複数の対象があってもよい)、また既知である必要性もなく(話者も、対象の存在を初めて知った場合も真になりうる)、どこかに一つ対象が存在すれば満たされる。この意味で(9)の定名詞句は、(3)の定性要件を満たさず、むしろ非特定の対象の存在について言及する不定冠詞の用法に近い。例えば、(10)の第二文のような動詞句省略による文並列では、普通の定名詞句は同一指示解釈が要求されるが(=10b)、弱定名詞句ではその必要がない(Carlson et al. 2006)。

(10) a. Bob went to the store, and Mary did too. (Carlson et al. 2006)

Bob と Mary は同じ store に行ってもよい、または別々の store でもよい。

b. Bob went to the desk, and Mary did too. (Carlson et al. 2006)

Bob と Mary は同じデスクに向かった(別々の机の解釈はない)

弱定名詞句を含む(10a)では、不特定存在解釈が可能であり、むしろ不定冠詞の機能に近い。しかし、ここでなぜ Bob went to a store にしないのかが問われねばならない。他の例も同様で、

定性が表されない（不要である）状況で、なぜ定冠詞 *the* が利用され、不定冠詞が使われないのだろうか（*go to a pub, read a newspaper, on a radio*）？また、これとの関連で無冠詞名詞句との類似性（不定存在、活動・習慣的意味の含意等）も指摘されている（*by bus, in bed, in jail, go to school, go to church*）。例えば *go to (the) hospital* は特定の病院に行く必要はなく、任意のある病院に行って、そこで治療を受けるという含意が加わる（*go to school* のような無冠詞名詞句の場合も同様に学習教育活動の含意がある。Carlson and Sussman 2005, Stvan 2007）。地域的差、方言差によるとも言われるが（イギリス英語では無冠詞 *go to hospital*, アメリカ英語では定冠詞 *go to the hospital* が現れる）、いずれにせよ、不定冠詞に対する定冠詞の優位性を確認すべきである。つまり、名詞句が限定詞句として出現しなければならない環境で、しかも無冠詞（ゼロ冠詞）が利用できない場合に、定性・不定性といった意味に駆動されない限りで無標形式として定冠詞（弱定名詞句）が利用されるのである。

### 3 ドイツ語の弱定名詞句と前置詞・定冠詞融合形

ドイツ語にも英語と似た弱定名詞句用法がある。上述したように、前置詞と定冠詞が隣接した場合、（冠詞強調の必要がない限り）前置詞・定冠詞融合形が義務的に現れる。

(11) a. *Gehen wir ins {Café/ Restaurant/ Kino/ Konzert/ Museum/ Krankenhaus/ Bett}.*

*Let's go into-the cafeteria/ restaurant/ cinema/ concert/ museum/ hospital/ bed*

b. *Gehen wir in die {Mensa/ Pizzeria/ Stadt/ Oper/ Schule/ Kirche}.*

*Let's go into the canteen/ pizzeria/ city/ opera/ school/ church*

c. *Ich gehe zum {Bahnhof/ Kaufhaus/ Supermarkt/ Arzt}.*

*I go to-the station/ department store/ supermarket/ doctor*

d. *Ich gehe zur {Bank/ Post/ Kirche/ Schule/ See/ Toilette}.*

*I go to-the bank/ post office/church/ school/ sea / toilette*

e. *die Zeitung lesen/ den Zug nehmen/ das Frühstück nehmen*

*the newspaper read the train take the breakfast take*

f. *am Fenster/ am Morgen/ am Sonntag/ im Bett/ im Supermarkt*

*at-the window at-the morning at-the Sunday in-the bed in-the supermarket*

(11) にあるように、ドイツ語では *ins, im, zum* など前置詞・定冠詞融合形が多いが、非融合形もあり（*in die/in der/in den*（女性対格／与格／男性対格）, *in the*）、また (11e) のように、前置詞のない目的語・動詞の組み合わせもある。融合形であることが弱定名詞句であることの前提条件とまではいえないが、融合形が使える場合、融合形と非融合形の対比があることによ

て、弱定名詞句の問題が鮮明になる（融合形は弱定名詞句解釈優先）。

(12) a. Ich gehe heute ins/??in das Krankenhaus. (文脈なしの場合)

I go today into-the/into the hospital

(私は今日病院に行きます)

b. Gehst du wieder in das/??ins Krankenhaus, in dem du letztes Jahr operiert worden bist?

(去年手術を受けた病院にまた行くの?)

(12a) の ins/in das Krankenhaus のように、前置詞融合形と定冠詞形が可能である場合、移動解釈（「へ行く」）では融合形が優先される。融合形では不定解釈が普通であるが、英語と同様に「治療を受けに行く」という活動・習慣的含意が生じる。定冠詞形を選ぶ場合は強勢アクセントが置かれて直示的解釈（「今問題にしているあの病院」）が強まる。関係節などで修飾された定解釈をもつ名詞句 (12b) の場合には逆に、定冠詞形 in das が普通であり、融合形 ins は許容しにくい。前置詞と定冠詞融合形は、純粋に形態論的問題であり、次のように名詞の性（男性・中性・女性）に依存して前置詞 an, bei, in, zu の形は変化する。

(13) 男性・中性与格 an dem → am, bei dem → beim, in dem → im, zu dem → zum

中性対格 an das → ans, in das → ins

女性与格 zu der → zur

例：am Meer（海辺で）、beim Abendessen（夕食時に）、im Zimmer（部屋で）

zum Bahnhof（駅へ）、ans Fenster（窓際へ）、ins Krankenhaus（病院へ）

ins Kaufhaus（デパートへ）、zur Schule（学校へ）、zur Uni（大学へ）

(13) の前置詞・定冠詞融合形は、定冠詞と名詞の性の一致によって常に可能であり、英語の弱定名詞句のような慣習的制限は少ない。例えば、中性名詞と3次元的空間性さえ満たされれば、ins Café gehen（喫茶店へ行く）、ins Restaurant gehen, ins Gasthaus gehen（レストランへ行く）、ins Hotel gehen（ホテルへ行く）、ins Kaufhaus gehen（デパートへ行く）、ins Zimmer gehen（部屋へ行く）といった融合表現が生産的に作り出せる。これらは融合形では不定解釈、非融合形定冠詞の場合は定指示という区別が傾向としてあると考えられる（その代わりにドイツ語では go to school/church/bed のような英語の無冠詞前置詞句形対応表現は少ない）。実際、Google 検索エンジン（www.google.de）でドイツ語に限定して検索すると、英語に対応する慣習的表現である „ins Kino“ + gehen ((go) „to the movie“) では450万件のヒットがある。検索例 „Ins Kino gehen und Kinofilme schauen war schon immer ein besonderes Freizeitvergnügen.“

(「映画館に行き映画を見るのはいつも特別な余暇の楽しみだった」)のように、„ins Kino gehen“の方は述部表現としてよく使われていることがうかがえる。定冠詞形 „in das Kino“ (gehen)では165万件と少なくなるが、検索例 „Bei größeren Kinooevents wie zum Beispiel Harry Potter, lasse ich mich auch als bekennder Nicht-Fan breitschlagen mit in das Kino zu gehen...“ (「Harry Potterのような大きな映画イベントでは私のような大した映画ファンでない者でも(そんな)映画に出かけることになる」)のように、特定の「映画を見に行く」というニュアンスが加わることが多い。逆に、映画館という建物を特定化(複数化)する定冠詞の例もある („Am Donnerstag kommen eine ganze Reihe Komödien in die Kinos.“「木曜はシリーズの喜劇がそれらの映画館にやってくる」)。不定冠詞形の „in ein Kino“ (gehen)では、38万件と頻度が下がる。弱定名詞 „ins Kino“ が不定機能を受け持っているためと考えられるが、既知性確立のための未知対象導入の役割を明示的に担っている、あるいは事象の任意性が強調されるのかもしれない(検索例 „Gehen 6 bis 13jährige allein in ein Kino, muss die Vorführung spätestens um 20 Uhr beendet sein.“「6~13歳の子供が一人で(そもそも)映画館に行くことがあれば、その上映は遅くとも20時には終わっていないといけない」)。また、「go to the hospital (病院に行く)」相当の表現では、弱定名詞句 „ins Krankenhaus“ (gehen)も定冠詞形 „in das Krankenhaus“ (gehen)もほぼ同数の348万件程度であった。従って、Krankenhausの場合にはどちらの表現も優勢であると推測される。

英語では弱定名詞としては慣習化していないが、ドイツ語では融合形になる場合について、„ins Restaurant“ „ins Café“, „ins Gasthaus“ + gehenを検索してみる。„ins Restaurant“ (レストランへ行く)の場合、33万件ヒットするが、その多くは一般的行為・習慣的意味で使われる。(14)にその一部を引用したが、「クリスマスに子供をレストランへ連れて行ってよいか」、「ある男が自分のフォークをもってレストランへやってくる」、「小さな子供が喫茶店に入ってきた」、「彼は私ともう一度食堂(Gasthaus)に行きたいという」など、不定用法が多い。一部に定解釈をもつ句も見られるが、それらはほとんど店の名前を明示することによって、固有名詞としての意味を前面に出している(„ins Restaurant VLET, ins Café Druen, ins „Gasthaus Braun“など)。(15)では融合形ではない前置詞と定冠詞 das(中性)の組み合わせ例を挙げたが、ここでは既知性(既に話題になったそのレストラン)や場面指示(写真で示すなど)によって指示対象が確立されている。あるいは関係節で規定されることによって、特定のレストランであることが明示される („in das Restaurant“自体は数が非常に多く、約219万件ヒットする。また、不定冠詞組み合わせの „in ein Restaurant“は387万件あった)。in das Restaurant „Alter Fritz“のように固有名詞によって特定化されている場合もあり、固有名詞の場合には融合形 ins と非融合形 in das が混在している。固有名詞の場合には、冠詞がなくても指示対象



の唯一性によって定性が保証されているので、融合形定冠詞 ins も定冠詞 das も直接的には指示関係に貢献していない。むしろ前置詞の格認可のために添付されていると考えられる。喫茶店 (das Café) やドイツ語固有の宿屋兼レストランに対応する das Gasthaus でもほぼ同様の現象が見られる ((14)~(17))。これらの例では、一見融合形の例の方がマイナーであるように見えるが、www.yahoo.de 検索では、ins Restaurant (gehen) は31000件、in das Restaurant (gehen) は7800件、in ein Restaurant (gehen) は12800件程度の検索例があり、融合形の件数が多い。また、Google 検索でも、前置詞句と過去分詞を述語一体で検索してみると、ins Restaurant gegangen (レストランへ行った) では26000件、in das Restaurant gegangen で13000件、in ein Restaurant gegangen で34000件であった。つまり、動詞句 (述部) 全体のコロケーションとして見れば、(不定名詞句を除けば) 融合形の方が非融合形よりも頻度が高い傾向にあると言える。

(14) ins Restaurant 「レストランへ」 (Google 検索例) :

- Baby/Kleinkind an Weihnachten mit ins Restaurant? (見出し・タイトル)
- Immer mehr Menschen gehen ins Restaurant.
- Ein Mann kommt mit seiner eigenen Gabel ins Restaurant und...
- Geht ihr manchmal alleine ins Restaurant?
- Falls man Lust hat, den geliebten Menschen doch lieber ins Restaurant auszuführen, ...
- Ich will eine Strechlimousine für die Fahrt ins Restaurant mieten...
- Nachdem er mit dem Bus von Seeburg nach Fuhrbach ins Hotel-Restaurant Zum Kronprinzen gefahren ist, ist ein schwarzer Kater... 「ホテルレストラン Zum Kronprinzen へ行く…バス」
- Laden Sie zu einer Veranstaltung ins Restaurant VLET in Hamburgs historischer Speicherstadt ein... 「レストラン VLET へ」

(15) in das Restaurant 「そのレストランへ」

- Gehen Sie nicht in das Restaurant. 「そのレストランには行かないように」
- Daher gehen wir fast jeden Monat einmal in das Restaurant. 「そのレストランへ」
- Eigentlich wollte ich nicht mehr in das Restaurant gehen. 「そのレストランへは」
- Er geht mit dir in das Restaurant, das seit letzter Woche geplant war.  
「先週から計画していたそのレストランへ」 (関係節)
- In der Regel sind Touristen nicht sehr wählerisch und gehen in das Restaurant, das gerade auf dem Weg liegt. 「途中にあるレストランへ (行く)」 (関係節)
- Er geht als Koch in das Restaurant „Goldenen Anker“ in Dorsten.

「レストラン „Goldenen Anker“ へ）

(16) ins Café 「喫茶店へ」 (Google 検索例) :

- Ein kleiner Junge kam ins Café.
- Was soll ich meinem Freund sagen, bevor wir ins Café gehen ?
- Morgen gehe ich ins Café und frage nach, ob jemand etwas beobachtet hat.
- Wenn mich mal wieder der Schnitzel-Jieper packt, gehe ich ins Café Mozart am Sendlinger Tor.

「『喫茶モーツァルト』へ行っても…」

- Wenn ich im Sommer nach Sonderburg segele, gehe ich oft ins Café Druen, denn dort gibt es alles... 「『喫茶 Druen』へ行きます、というのもそこには…」

(17) ins Gasthaus 「レストラン (料理店兼宿屋) へ」 (Google 検索) :

- Hannes meinte, er hätte bereits gegessen, aber er würde noch mal mit mir ins Gasthaus gehen.
- Gehe ins Gasthaus, iss etwas und höre den neuesten Tratsch.
- Den Frauen war es nicht recht, ihre Männer wöchentlich allein zum „Singen“ ins Gasthaus gehen zu lassen.
- Alles in allem kann man gut und gerne ab und zu ins „Gasthaus Braun“ gehen.

ドイツ語の特徴として前置詞句における融合形と非融合形の解釈を問題にしたが、融合形のない場合でも、通常の定解釈と弱定名詞句の解釈の曖昧性は生じることには変わりはない。

(18) a. Gehen wir heute in die (eine) Pizzeria. (今日はピザ屋に行こう : 弱定名詞句)

b. Wir gehen jeden Monat einmal in die Pizzeria. (毎月1回そのピザ屋に行く : 定)

(18a, b) のように同じ定冠詞 die (女性対格) であっても、「どこかの」という弱定名詞句解釈と定の解釈 (特定の対象指示) の2つが可能であり、前者は強勢なし、後者は強勢アクセント可能である (弱定名詞句解釈では不定冠詞との置き換えも可能)。以上の議論をまとめると、ドイツ語の場合、前置詞と定冠詞の融合形の存在によって弱定名詞句解釈が促進される。融合形は基本的に弱定名詞句の解釈が無標であり (定の解釈になる場合は固有名詞が多い)、それとの対比で非融合形の定冠詞形は定性解釈になりやすい。このような形態的対立がない前置詞句では、2つの意味解釈が可能である、ということを引き出すことができる。

Carlson et al. (2006) で問題になった並列配置の動詞句省略における弱定名詞句の解釈はドイツ語でも同様に当てはまる。次の (19a) では融合形の zum Supermarkt (スーパーマーケットへ) の場合、Hans と Maria が同じスーパーでも別々のスーパーに行っても真理値は変わら

ないが、(19b) の前置詞 zu + 定冠詞 dem の場合は、2人が同じスーパーに行く場合に真となる。結局、(19a) の解釈は、不定冠詞に置き換えた不定名詞句の (19c) の意味解釈と同じになる (「Hans があるスーパーに行く、そして Maria もそうする」)。

- (19) a. Hans geht zum Supermarkt und Maria auch. (別のスーパー)  
 b. Hans geht zu dem Supermarkt und Maria auch. (同じスーパー)  
 c. Hans geht zu einem Supermarkt und Maria auch. (不定名詞句「あるスーパーへ」)

一方、前置詞句以外の環境としては動詞の目的語となる場合があるが、主語項として出現する可能性はほとんどない。(20a) の目的語位置では不定解釈が可能であるが、(20b) のように主語役割では、die Zeitung (その新聞) は不定解釈をもたず、指示的意味しかもてない。

- (20) a. Ich lese jeden Tag die Zeitung. 私は毎日、(その) 新聞を読む。(目的語)  
 b. Auf dem Sofa liegt eine/die Zeitung. ソファの上に新聞 (その新聞) がある

#### 4 考察と結論

以上の分析から、ドイツ語でも定性を表さない弱定名詞句があること、それらは英語と同様に習慣的・活動的の意味をもつが、英語と違って、前置詞・定冠詞融合形の場合、弱定名詞句解釈が促進されやすいことを示した。ここで、冒頭の問題に立ち返って考察してみよう。

弱定名詞句の統語的・意味的・語用論的役割は何か？ 弱定名詞句は主語項には現れず、動詞目的語や前置詞句目的語として現れる。つまり、語彙的主要部に統率された補部として現れる。これは、弱定名詞句が項としての指示性 (個体の対象指示) を弱めて述語の一部に編入されている可能性、あるいは述語的属性 (property) の意味として機能することを示唆する。go to the hospital は「x が病院に行く、そのような場所 y がある」という意味よりは、「x が病院のようなところに治療に行く」という述語意味になる。もしこれが正しいなら、弱定名詞句が主語になれないのは当然であり、照応形の先行詞にもなりにくい (対象を指示しない)。しかし、述語編入を採用するにはまだ証拠が足りない。もう一つの可能性は、不定冠詞の不定存在と同じ意味をもつと考えることであり、それは元々の弱定名詞句の意味からすれば当然であり、(10) (19) の動詞句省略における名詞句の指示対象が異なることから導かれる (名詞句を満たす対象 a があり、別の事象では別の対象 b がある)。しかし、不定冠詞の意味それ自体であれば、弱定名詞句はなぜ主語位置に現れないのかという疑問が残る。また、関係節による名詞句修飾がなぜできないのか説明できない (不定名詞句では問題なく可能である)。そこでこの問題を解決するため、弱定名詞句の照応・指示関係をもう少し詳しく検討してみる。

弱定名詞句を先行詞とする照応は不可能ではないが、確立しにくい。次の(21a)では完全な定名詞句を指示代名詞(der)や代名詞(er)で照応させ、同一指示関係を作ることができるが、弱定名詞句(21b)では、代名詞er(=he)による照応は困難である(Bosch 2010の例)。指示詞derの場合、強調や場面指示などで独自の指示力を発揮できるが、人称代名詞erは先行詞との言語的照応関係(照応を通じた新しい指示物 new referent への指示)に依拠する必要がある。

(21) a. Ich wollte noch zu dem Supermarkt. {Der/Er} ist nur bis 7 geöffnet.

I wanted still to-the supermarket to go. It's only open till 7.

b. Ich wollte noch zum Supermarkt. {Der /?#Er} ist nur bis 7 geöffnet. (Bosch 2010)

(その) スーパーへ行こうと思った。それは7時までしか開いてない。

融合形名詞句 zum Supermarkt と er の結びつきがやや付きにくいのは、zum Supermarkt が具体的対象を指示する力が弱いからである。一方、指示詞 der (それ・あれ) による zum Supermarkt への遡及が可能である点は、融合句が完全な述語的属性ではないことも示す。ちなみに前置詞と不定名詞句 zu einem Supermarkt ,to a super market' に変えると代名詞による照応は問題ない。

Bosch (2010) のもう一つの対比例を見る。完全定名詞句の場合は der andere のような指示詞による対比が可能だが、融合形や不定名詞句は対比が若干難しい。これも融合形が指示物の存在を保証しない例として考えられる。

(22) a. Warst du schon in dem Supermarkt? Der andere hat zu. 完全形

were you already in the supermarket? The other one has shut.

あのスーパーへはもう行った? 別のスーパーはもうつぶれているよ。

b. Warst du schon im Supermarkt? #Der andere hat zu. 融合形 (#: 意味的逸脱)

c. Warst du schon in einem Supermarkt? #Der andere hat zu. 不定名詞句

既に見たように、融合形名詞句は関係節の先行詞にはなりにくい。これも、具体的な指示対象との関係を作り出すことが困難である証拠であろう。

(23) Bist du {zu dem/??zum} Supermarkt gegangen, den Maria empfohlen hat?

Are you to the/to-the supermarket gone that Maria suggested has

Maria が行くとよいと勧めていたスーパーにはもう行った?

こうした性質と動詞句省略を合わせると、ドイツ語の完全形における定名詞句の一部および前

置詞融合形は、通常の個体指示とは異なる不定解釈をもつのは明らかである。また、動詞句省略による別指示が可能であることや、指示詞による対象言及も可能であることから、まったくの述語解釈であるとも言えない。不定冠詞とも異なることから、存在量化詞を導入するとも言いがたい。ここでヒントになるのは、英語の活動意味の含意である。ある活動を行うために典型的な場所に行く場合に定名詞句が使われる（学校、教会、病院、パブなど）。ドイツ語でも同じ含意が可能であり、「映画館に行く」ような、非常に典型的な事象において融合形が多い。しかし、レストランの場合には、融合形も完全形も頻度の差はあまりない（色々なレストランがある）。そこで可能な解釈として、弱定名詞句は具体的な特定対象の存在を仮定しない代わりに、典型的な事象タイプ（場所タイプ）を仮定すると考える。例えば、社会制度、公共設備、生活・娯楽関連場所、典型的に想定できる地理的場所、そこへの移動などである。

(24) Hans geht zum Supermarkt und Maria auch.

ハンスはスーパーマーケットの典型タイプの場所に行く。

そして、マリアも同じ典型タイプの場所に行く。

(∴ 同じ具体的場所でもよい。典型タイプの違う現れとしての場所でもよい)

具体的対象がトークン、典型的タイプがタイプであるとすれば、タイプはトークンを内包すると言える (Bosch 2010参照)。しかし、弱定名詞句が示す典型タイプは具体物としてはマッチしないので、言語的照応関係は容易には作れない。そこから「私はスーパーマーケットのタイプに行った。それは7時までしか開いてない」といった解釈の不自然さが説明でき、(21) の *der* (あれ) のような指示詞によって、タイプからトークン（具体事物）への転換が促される（「スーパーのようなタイプの具体的な場所のそれは…」）。このように把握することによって、なぜ定冠詞であるのかも説明できる。その対象は、具体的指示対象としては不定（どれかあるもの）だが、抽象的事象としての典型タイプとしては定性（唯一性）を示すのである<sup>2)</sup>。

(25) <i>in die Schule gehen</i>	<i>ins Kino gehen</i>	<i>die Zeitung lesen</i>
<i>into the school go</i>	<i>into-the cinema go</i>	<i>the newspaper read</i>
学校に行く（教育）	映画に行く（娯楽）	新聞を読む（教養・余暇）

これらはミクロレベルでは不定の対象を指すが、マクロな活動に引き寄せれば特定のタイプである。その前提として社会的・習慣的な認知が必要である（例えば *den Zug nehmen* 「列車に乗る」も定冠詞の事例がかなり多い。しかし、「タクシーに乗る」場合は、不定冠詞（無冠詞）の (*ein*) *Taxi nehmen* が多いようである）。

この典型タイプ分析では、主語項としての現れも予測可能なはずである。実際、前置詞融合

形は主語にはなれないが、総称表現の一部を弱定名詞句とみなすことも可能だろう<sup>3)</sup>。

(26) Das Auto ist ein beliebtes Verkehrsmittel. 車は人気のある交通手段だ。(Grimm 1989)  
the car is a preferred traffic means.

das Auto は「一般にほとんどの車」という網羅的解釈ではなく、「カテゴリータイプとしての車」という意味と考えられる。この場合、具体事例は問題でなく、文全体が範疇一般化を表している。このような用例と総称表現との関連、種解釈との関連はここでは詳述しない。

前置詞融合形と弱定名詞句との関係について見ると、前置詞融合形は弱定名詞句として典型的タイプを一般的に示す手段になり、また、談話との指示関係をもたない「形式的用法」の一部としても多用される。それは表現形式においても経済的で、意味的にも誤解を避ける手段として便利である。ただし、融合形があるためにドイツ語では無冠詞名詞句はそれほど多用されないとも推測することができる。

いずれにせよ、ドイツ語の定冠詞は個体としての特定事物を指示するという素朴な指示関係だけでなく、不特定事物に関連する抽象的なタイプ指示の場合でも利用される。その理由は、文(命題)の中で名詞句を際立たせるためには限定詞が必要であり、限定詞の典型として(伝達意味の少ない)定冠詞が最適だからである。

## 注

- 1) ドイツ語定冠詞の歴史的発生については Leiss 2000 参照。名詞句を、限定詞 D を主要部とする限定詞句 DP と分析する見方については Abney 1987 参照。本論では名詞句が NP か DP かという議論については言及しない。定性をめぐる分析では意味論的方法と語用論的方法(話者・聞き手の役割)で異なり、また、唯一性(対象の存在に加え、その存在が一つに限定される)を重視するか、文脈における既知性(不定名詞句も定名詞句も談話に対象=変項を導入する点は同じで、違いは不定名詞句では新たな指示物 referent が導入され、定名詞句では談話状況に既に存在する対象について言及する。Heim 1982) を重視するかでアプローチが異なる。
- 2) (14) の ins Restaurant VLET のような融合形+名詞+固有名詞は一見タイプ分析への反例に見えるが、この場合タイプとトークンの合成が起きていると考えればよい(「VLET という具体的な対象の現れをもつタイプのレストラン」へ行く)。
- 3) 総称表現と種(kind)表現は区別される。種に関する言及は、Der Saurier ist ausgestorben。(恐竜は絶滅した)のように、種述語を必要とする(aussterben は種全体について言及可能)。一方、(26)の述語は、個体レベルを主語に取ることもできるので種術語ではない。詳しくは、Chierchia 1998 参照。

## 参考文献

- Abney, S. P. 1987. *The English noun phrase in its sentential aspect*. Cambridge, Mass.: Doctoral dissertation, MIT.
- Bisle-Müller, H. 1994. *Artikelwörter im Deutschen*. Tübingen: Niemeyer.
- Bosch, P. 2010. Weak definites and German preposition-determiner contractions. *Workshop on Specificity from theoretical and empirical points of view*. Stuttgart: Universität Stuttgart.
- Bühler, K. 1982<sup>(1934)</sup>. *Sprachtheorie*. Stuttgart: Fischer. (邦訳: 脇阪豊他 訳. ビューラー「言語理論」上・下、クロノス).
- Carlson G. and Sussman, R. C. 2005. Seemingly Indefinite Definites. Kepser, S. and Reis, M. (eds.) *Linguistic Evidence*, Berlin/New York: Gruyter, 71-86.
- Carlson, G., Sussman, R. C., Klein, N., Tanenhaus, M. 2006. *Weak Definites Noun Phrases*. Ms. University of Rochester.
- Chierchia, G. 1998. Reference to Kinds across Languages. *Natural Language Semantics* 6, 339-405.
- Duden 2006. *Grammatik der deutschen Gegenwartssprache*. Mannheim: Dudenverlag.
- Ehrich, V. 2007. Der Bloße Singular in koordinativen Verknüpfungen. *Neue Beiträge zur Germanistik*, Band 6/3, 9-30.
- Grimm, H-J. 1986. *Untersuchungen zum Artikelgebrauch im Deutschen*. Leipzig: VEB.
- Grimm, H-J. 1989. *Lexikon zum Artikelgebrauch*. Leipzig: VEB.
- Heim, I. 1982. *The Semantics of Definites and Indefinite Noun Phrases*. Amherst: Doctoral dissertation, University of Massachusetts
- Helbig, G./Buscha, J. 2005. *Deutsche Grammatik*. Berlin et al.: Langenscheidt.
- Leiss, E. 2000. *Artikel und Aspekt*. Berlin/New York: de Gruyter.
- Löbner, S. 1985. Definites. *Journal of Semantics* 4: 279-326.
- Longobardi, G. 1994. Reference and Proper Names. *Linguistic Inquiry* 25, 609-665.
- Lyons, Ch. 1999. *Definiteness*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Poesio, M. 1994. Weak definites. *Proceedings of the Fourth Conference on Semantics and Linguistic Theory, SALT 4*, 282-299. Rochester: University of Rochester.
- Russell, B. 1905. On denoting. *Mind* 14, 479-493.
- Stvan, L. S. 2007. The functional range of bare singular count nouns in English. In Stark, E., Leiss, E. Abraham, W. (eds.) 2007. *Nominal Determination*. Amsterdam/Philadelphia: Benjamin, 171-187.
- 有田潤 1992.『入門ドイツ語冠詞の用法』三修社.
- 織田稔 2002.『英語冠詞の世界』研究社.
- 関口存男 1960.『冠詞』第1巻. 三修社.
- 吉田光演 2003.「冠詞の意味論」、『月刊言語』Vol.32, No.10、大修館、58-65.
- 吉田光演 2010.「ドイツ語・英語の前置詞句内名詞句の無冠詞形と融合形」、『人間科学研究』5 (広島大学総合科学研究科)、25-38.

## Schwache definite Nominalphrasen im Deutschen: Inwieweit lässt sich der bestimmte Artikel als „definit“ bezeichnen?

YOSHIDA Mitsunobu

Definite Nominalphrasen, die durch einen definiten Artikel eingeleitet werden, aber nicht ein bestimmtes (bekanntes oder einziges) Objekt, sondern irgendein beliebiges denotieren, heißen „schwache definite Nominalphrasen“ („weak definite NPs“; im Folgenden SDNPs):

(1) a. Maria went to {the bank/the hospital/the movie/the store}.

b. Maria ist {zur Bank/zum Krankenhaus/ins Kino/zum Kaufhaus/in die Oper} gegangen. Obwohl die NPs/PPs mit einem definiten Artikel versehen sind, referieren sie nicht auf ein spezifisches, sondern ein indefinites Objekt. Das lässt sich z.B. durch VP-Ellipse bei der Koordinierung verdeutlichen:

(2) a. Bob went to the desk, and Mary did too. (Carlson, Sussman, Klein and Tanenhaus 2006)

b. Bob went to the store, and Mary did too.

c. Hans ging ins Kino, und Maria auch.

Wenn es sich um eine übliche definite NP wie „the desk“ in (2a) handelt, ist das Objekt im ausgelassenen Teil identisch mit dem Denotat der NP im ersten Satz. Im Gegensatz dazu kann bei den SDNPs in (2b) und (2c) ein anderes Objekt denotiert sein, wobei implizite Bedeutungen wie soziale Aktivitäten, besondere Zwecke usw. hinzukommen („ins Kino gehen“ bedeutet „in ein Kino gehen und einen Film sehen“). Interessant ist dabei, dass im Deutschen die Verschmelzung von Präposition und Definitartikel (*ans, beim, im, ins, zum, zur*) vorwiegend als SDNP interpretiert wird, während ein vollständiger Definitartikel in der PP oft als normale definite Deskription fungiert wie „ins Kino gehen“ vs. „in das Kino gehen“. In diesem Aufsatz untersuchen wir den Zusammenhang von Verschmelzung und SDNP und überprüfen, ob dabei tatsächlich eine solche schwache Lesart vorliegt, um daraufhin die Frage zu erörtern, in welchem Umfang der bestimmte Artikel noch als „definit“ bezeichnet werden kann. Aus den verschiedenen Befunden ergibt sich, dass die SDNP weder einen neuen Referenten einführt, noch Bezug auf einen alten herstellt, aber trotzdem einen bestimmten Typ darstellt, der auf die Existenz eines konkreten Tokens hinweist: „ins Krankenhaus kommen/müssen“ bezieht sich auf eine typische gesundheitsorientierte Aktivität, in der die Erscheinung eines typischen Krankenhauses inkludiert ist. In diesem Sinne können wir die SDNPs semantisch als „definit“ bezeichnen, obwohl sie pragmatisch indefinit sein können.